松村通信第１３６号

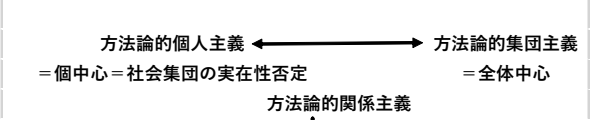
2023 年 3 月 28 日
松村勝弘

方法論的関係主義

今年の桜の開花は､信じられないほど早い。最近はそれを楽しんでいるが。

関係主義など　前号で、ガーゲンの関係主義についてまとめてみた。そして前前号で方法論的関係主義について考えたいとも述べた。でも、まとまらない。それは西洋発の啓蒙主義、個人主義の行きづまりをどう考え、それをどのようにして乗り越えればいいのか、というところに行き着くだろう。構造主義やポスト構造主義、社会構成主義などなど、個人主義の行きづまりが前提で議論がなされている。ただし新古典派経済学などではいまだ個人主義が基礎となっているようである。

あらかじめ述べておきたいが、西洋は個人主義的だが日本は集団主義的だといわれる。個人主義と集団主義という二区分がされるが、そうではないんだということで方法論的関係主義が主張される。図示すると下記のようになるだろう。こちらは個人主義にも集団主義にも乗れないということを意味している。



ただ、次に紹介する鄭雄一教授は関係主義を主張しているわけではないが、個人主義と集団主義の関係をわかりやすく整理しているので紹介したい。鄭教授は、個人主義には違和感をお持ちのようである。集団主義でもないと思われる。そのどちらをも、ある種超克しようとされているように思える。

鄭雄一教授　ここでは鄭雄一東大教授の 2 冊の新書を手掛かりに考えてみたい。一つは『東大理系教授が考える道徳のメカニズム』(ベスト新書、2013 年)であり、もうひとつは、『東大教授が挑む AI に「善悪の判断」を教える方法　「人を殺してはいけない」は“いつも正しい”か？』(扶桑社新書、2018 年）である。

鄭教授は現在神奈川県立保健福祉大学の副学長でもあるが、東京大学医学部出身でハーバード大学などを経て、東京大学大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻の教授であり、東京大学大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター臨床医工学部門の教授であり、神奈川県立保健福祉大学 ヘルスイノベーション研究科の研究科長を経て副学長となられたのである。だから兼務兼務兼務という立場である。その他昭和大学客員教授と務められるなど多才である。

教授はまた、1 話 10 分で学ぶ教養動画メディアテンミニッツ TV で、「老いない骨のつくり方　(全 5 話)」「道徳と多様性～道徳のメカニズム　(全 6 話)」「AI に善悪の判断を教える方法～新しい道徳論　(全 8 話)」などのビデオ講義をされている。これらを参考にしながら、紹介していきたい。

鄭教授は「個人主義」と「集団主義」を「個人中心の考え方」と「社会中心の考え方」という言い方で対置されている。前者では「理性を有する自由な個人」が前提されており、個人と社会を切り離して考えるが、具体的な道徳の枠組みを構築することができず、これはまた道徳性が欠如しており、「個人の神格化」をもたらすという問題点があるとされる。他方、後者の場合、特定の宗教や伝統、習慣に基づき、善悪の区別の明確な枠組みを提供してくれ、安定していて迷いがないが、異なる「理想の道徳」を持つ社会、例えばキリスト教とイスラム教のように衝突すると無力だという問題がある。両者間で寛容性が欠如しており、これは「(特定の)社会の神格化」をもたらすとされる（鄭[2018]71-74 頁)。

社会学・心理学では　でも、社会学では古くから関係主義への関心が深かったようである。また、「今日、かなりの数の社会科学者が、何らかの意味で自分たちを関係主義者だと認識している」[1)]という。また、

社会心理学の分野でも、「一部の社会心理学者は個人主義者であり、数人は集団主義者であった可能性がありますが、大多数は関係主義者であったし、今も関係主義者」だという[2)]。

今でもあらゆる学問が西洋由来のものである。新古典派経済学、マルクス経済学、などなどすべてそうである。それでよいのか。心理学の分野ではアジア固有の研究が必要だという機運があるようである。そのような研究が新たな地平を開くという期待を持って進められている。香港や中国の４人の学者がそれを試みている。紹介したい。「地域固有の心理学とは何なのか。西洋の心理学者がなぜそれに関心を持つべきなのだろうか。もっと重要なことは、地域固有の心理学が、人格を研究するに際して知識がどのように形成されるのかについての新しい方法へと、いかに、導くのかということである。これらの問題に答えるために、われわれは、人間存在についての地域固有の概念が理論構築に関する新しい概念や方法論にいかに導くのかを、検討する。地域固有という問題を超えて、われわれは、方法論的個人主義から方法論的関係主義へというパラダイムシフトを主張するものである。関係主義的概念を超えて、われわれは、アジア的伝統に喚起されることによって個性(selfhood)というものを再構築したいのである。われわれは４つのアジアにおける知的伝統、すなわち、儒教、道教、仏教、それにヒンズー教、に基礎づけられた固有のものに、分析を限定する。」[3)]このように当面、儒教、道教、仏教、ヒンズー教に限定して、分析し、西洋的個人主義を批判している。しばしばアジアは集団主義だとして、個人主義の立場から批判的にみられている。Ho らはアジアが集団主義だという言説に批判的である。西洋の理論家でも社会構成主義者ガーゲン(Gergen)などは個人主義に批判的であるという(Ho, et al.[2001]p.934)。ガーゲンについては前号で紹介した。経済学や経営学でも、アジア固有のものを発信し、パラダイムチェンジを行うことはできるだろうか。そうしなければならないように思う。

日本の社会学における関係主義　日本の社会学者でも、関係主義を主張している。佐藤慶幸『アソシエーションの社会学』(早稲田大学出版部、1982 年）でそのように論じられている。われわれに関心の深いところを中心に紹介しておこう。そこでは個人主義について、こう述べている。「人びとに個人意識を覚醒させたのが、宗教改革であり、またそれと内的に適合的関係にあった近代資本主義の発達であった。この点に関しては、とりわけマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で明らかにしていることは周知のことである。内面的主観性の自由にもとづく良心と信仰のみによって直接に神とコミュニケートし、いっさいの制度的儀礼的なものを否定したプロテスタントと、自己の利益を競争的努力によって追及する経済学者のいう『経済人』との間には、明らかに近親性がある。いうまでもなく、前者の宗教的行為は、ウェーバーのいう価値合理的行為類型の原型をなし、後者の経済的行為が目的合理的行為類型の原型をなしているのである。この歴史的段階にいたって、人間はその本来の特性である明確な個人的な＜意識性＞にもとづく意思決定主体として自己を確立するにいたる。すなわち、個人主義の確立である。」(22-23 頁)

だが、主意主義、ヴォランタリズムに触れながら、「主意主義は、自己の欲求充足を最適化しようとして社会を変革しようとする人間努力のうちにみいだされうる。たしかに、そこには能動的で自立的な近代的自我が想定され、その自我による社会の変革が述べられている。しかし、その自我はあまりにも自己中心的な自我であり、自己のデーモンをみいだし ── 価値合理的に ── それに従って行動する『孤立した個人』の目的合理的行為が主張されているにすぎない。そのような人間は『現代社会の現実的人間』の一部 ── 資本主義社会の積極的な擁護者であり推進者 ── でしかないのである。

われわれの主張する＜ヴォランタリズム＞は、まずなによりも近代的自我意識にもとづく自己中心化の傾向の克服を目指すものである。」(104-105 頁）個人主義に限界のあることに言及されている。

他方集団主義については、とりわけ日本の集団主義については、否定的である。すなわ

ち「わが国の集団主義は、あくまでも国家や企業のためのそれであり、たとえそれが『組織に対する献身的な態度も、自己犠牲ではなく、自分自身の利害に直結するという意識』にささえられているとしても、その『自分自身の利害』は、きわめて個別主義的な私的利害であって、普遍主義的な個人の自由と自律性を求める欲求ではないのである。わが国の集団主義は、現代社会では、肥大化した個別主義的な私的欲求の充足のための集合的企てを意味するものでしかない。われわれの追求するヴォランタリー・アソシエーションは、わが国の集団主義とは対立し、その否定の論理に立脚することを強調しておきたい。」（25頁）

他方、方法論的関係主義についても言及している。「行為論の立場は、社会システムの世界に立脚しながら、そのシステム世界から自律した自由な行為世界の形成可能性に目を向けるのであって、なにものにも拘束されない自由な選択可能な行為世界という独我論の立場[方法論的個人主義]とは根本的に異なる。いかなる社会もそこに生をうけた人びとに選択的な意思決定による行為を許容しないほど[方法論的集団主義のように]非弾力的ではないし、また個人はすでにある社会からまったく自由に選択的な意思決定ができるわけではない。ヴォランタリズムにもとづく行為論は、……行為はエスタブリッシュドされた諸社会システムに規定されているがゆえに、それを行為の背景ないし基層としながら、そのうえに行為者に開かれた選択可能な世界を想定するのである。」（74頁）

個人主義の限界にも触れながら、かつ集団主義に否定的で、方法論的関係主義さらにはヴォランタリズムに活路を見出されているようである。

「方法論的ヴォランタリズムの観点からすれば、社会システムは、行為主体としての複数の参与者がそれぞれの立場で当システムに付与する複合的な意味の世界から構成されているとみなしうる。この複合的な意味の世界の構成において、重要な役割を果たすのが、社会的行為の基本的要素である他者志向性ないし他者関係性である。われわれはこれを＜自己－他者＞関係としてとらえ、それを基本として社会をとらえる視点を、方法論的個人主義と方法論的集合主義（あるいは＜社会＞主義）に対して、方法論的関係主義として提示したい。方法論的関係主義は、方法論的個人主義のように社会の実在性を否定して個人のみの実在性を主張するのでもないし、また方法論的集合主義のように個人は社会というより大きな実在の一部にすぎないという基本的な主張にも与しない。われわれのいう方法論的関係主義は、社会や個人の実在性ということではなくて、社会も個人もともに関係性のうちにのみ存在するということ、しかもその関係性はたんに地位－役割関係としてのみではなくて、またたんなる契約関係(contact)としてではなくて、人びとを内面的に関係づけるという意味での契約関係(covenant)として存在するということを基本的前提として措定する。」（77-78頁）

経営学での方法論的関係主義　経営学で方法論的関係主義を論じるものはほとんどないが、言及されているものがある。中條秀治「経営組織論の方法（2）－方法論的関係主義－」『中京経営研究』（第7巻第2号、1998年2月）が、先の社会学における佐藤[1982]に依拠しながら展開されているが、私自身もう少し考えを深めるための参考にはなる。いずれ論じてみたい。ここでは紹介しておくだけにしたい。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

1）Osmo Kivinen, Tero Piiroinen,“Toward Pragmatist Methodological Relationalism: From Philosophizing Sociology to Sociologizing Philosophy”, *Philosophy of the Social Sciences* Vol.36 No. 3, September 2006, p.1.

2）GEORGE RITZER, PAMELA GINDOFF, “Methodological Relationism: Lessons For and From Social Psychology” ,*Social Psychology Quarterly*, 1992, Vol. 55, No. 2,p.128.

3）David Y.F.Ho, Si-qing Pen, Alice Cheng Lai, Shui-fun F.Chan, “Indigenization and Beyond: Methodological Relationalism in the Study of Personality Across Cultural Traditions” *Journal of Personality*,Vol.69,No.6, Dec.2001、 pp.925-926.

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。